

# 目 次

第I部 翻訳と自由 19

第1章 翻訳と自由——ことばのかたちを（移植）する 21

第2章 感情のリベラリズムから二重視へ——漠たる（意図）をつなぐこと 45

第II部 二重視の諸相 59

第3章 ロンドン・アイからダブル・アイへ

——一九五〇年代の若者たち、そして労働者たち 61

第4章 ふたつの二重視——ポピュラー・ポリティクスとブレヒト再発見 77

第5章 ゆがめられる記憶、幻視される過去

——デヴィッド・ヘア『プレンティ』とブレヒト的あるいは残滓的（経験）の問題 93

第III部 ラディカルなネイションへ 111

第6章 社会の（消失）とモダンゼイション——トリリング、ウィルソン、ウィリアムズ 113

第7章 英語圏ナショナリズム論のなかのウェールズ

——一九八三年のネイション、そして（個人） 135

第8章 盲者のまなざし、カイツブリの眼

——『ブラック・マウンテンズの人びと』から『大阪アースダイバー』へ

151

終章 活動としての文化、そして「わたしのソーシャリズム」へ 183

あとがき 197

注 201

初出一覧 215

参考文献 228



## 序 章

一九八三年、ロンドン。その著書『二〇〇〇年にむけて』をめぐる議論のなかで、レイモンド・ウィリアムズは、二〇一〇年代の現在からすると、驚きをもって受けとめられそうな発言をしている――

わたしは……軍隊という場所が嫌いです。というのも、そこで四年すごしたことがあるからで、つまりそれが、あまりにも直接的な経験ダイレクトだったためです。ですが、ユーゴスラビアに滞在して、ユーゴスラビア軍を目にしたとき、わたしはそれに敬意をおぼえましたし、いまでも敬意をもちつづけています。というのも、ユーゴスラビア軍の存在は、自分たち自身の生活を素材におこなわれている、いわば社会的な実験の、その条件のひとつをなしてきたのですからね。そしてわたしは、その実験の価値に敬意をいだいているのです――もちろん、あちこちに批判されるべき部分があるにしても、です。(Williams and Barnett: 57:16-57:52)

これはイギリス国内での平和運動をめぐる議論が交わされたときの発言である。平和主義パシフィズムのなかでも、完全非暴力の立場と、自衛を認める立場とのあいだで対話が必要だと述べる文脈のなかで、上記の発言がなされる。

あわせて、「イギリス (Britain)」という国民国家の枠組みそれ自体への、(根本的な) 懐疑を示すなかでの言葉であることにも注意が必要だろうか。イギリスは、経済や軍事という観点からすると、じつは自律的な存在では

ない。イギリスの資本は国際的なそのの一部をなしているし、軍にしてもNATOあるいはアメリカとの軍事同盟の動きにおおしく左右される。したがって、イギリスという枠組みだけで、平和運動や労働運動、社会主義運動を組織することには無理がある——このような主張の背景にあるのは、一九八〇年代ウイリアムズのソーシャリストとしての位置取りである。より正確には、「ウェールズ系ヨーロッパ人 (Welsh European)」という自己規定と一緒に打ち出されるソーシャリズムである。彼の念頭にあったのは、既存の国民国家のそれとは別の地理的そして歴史的枠組みだった。よりローカルな紐帯(ウェールズ)と、より広範なつながり(ヨーロッパ)の双方を重視するウイリアムズのソーシャリズムにとって、複数の共和国が連邦制をむすびながら独自の社会主義を展開するユーゴスラビアが、ひとつの参照点だったことは想像にかたくない。

その約十年後の一九九四年、イングランド南部、ミルトンキーンズ。ウイリアムズの小説『帰属心』をめぐって真剣な問いを投げかけたことのあるカナダ生まれの書き手、教育者にして(のちの)政治家マイケル・イグナティエフは、こう聴衆に語りかけることになる——

これは、村のなかでの戦争です。だれもが顔見知りなのです。おなじ学校に通い、戦争前にはおなじ修理工場場で働いていた人たちもいます。いまの交際相手の女性が、むかしだと付きあっていたのか、みんな知っているのです。「それが」毎晩、民間無線で通信しては、たがいにののしりあう。おたがいに裏切って殺しあう準備をしている。

(Qtd. in Woodward 8)

一九八九年のベルリンの壁崩壊——その数年後、ユーゴスラビアでは凄惨な内戦が勃発する。チトーのもと、スターリンとも決別し一定の自立性を獲得、労働者による企業の自主管理も進め、西欧諸国のソーシャリストたちにとって、希望の資源だった社会主義国——ここが凄絶な民族紛争の場所と化したのだった。

むしろ、これは、英文学や近代演劇の批評家、小説家、第二次大戦時の土官、ケンブリッジの教授、メディア

研究の源流、古典学者、人文学者、鉄道信号手の息子、そしてソーシャリストと、さまざまな形容がいまでもなされるウィリアムズの、その死後の話である。ユーゴスラビア連邦共和国の崩壊を目にすることも、その後、セルビア人とクロアチア人とが繰り広げた「村のなかでの戦争」の報道も耳にすることもなく、一九八八年、大動脈瘤乖離によりウィリアムズは他界した。もしも存命であったら、おそらくかなりの衝撃を受けたであろうと個人的には想像する。さらに、旧ユーゴでの誇張抜きの血で血を洗う民族紛争によって、ソーシャリストとしてのウィリアムズという位置づけに言及しにくくなったということも（これが彼の作品の読みにくさの決定的な要因となっている）、本書はまったく否定しない。

とはいえそれは、ウィリアムズのソーシャリズムが、旧ユーゴの独自路線社会主義と等号で結べるものだ、ということの意味するものではないのだ。もちろん、後者の実践がウィリアムズにとって貴重なリソースであったことに疑いをはさむ余地はない。さらに彼のソーシャリズムが、(ナシヨナリズムというよりも)ローカルな紐帯としての「ネイション」を抜きには語り得ないものであることも、本書後半で論じるように確かである。こうなると、旧ユーゴでの諸民族間の戦争によって、彼のソーシャリズム論の価値が決定的に切り下げられてくるように思えてしまう——はたして一九八〇年代ウィリアムズのソーシャリズム論には、もはやなんの価値もないのか。ただし、ウェールズとイングランドの境界沿いでその形成期を過ごしたウィリアムズには、ある種のしたたかさがあったのではないか、本人の言葉でいえば「狡猾さ」があったのではないか(第8章参照)。こう考えてみる余地はまだ残っているようにも思う。歴史をひもとけば、境界沿いのくには外敵や疫病が不意に侵入してくることの多い場所だとも言えよう。ウィリアムズは、そうした場所、すなわち不測の悲劇を経験することがその日常である場所の書き手たろうとしたのだと言ってもよいのだが、そうした場所性の産物とも解せるしたたかさをもってしても、しのぎきれないような出来事が、その死後に生じてしまったのだろうか。ベルリンの壁崩壊、社会主義諸国の解体、旧ユーゴ内戦によって、ウィリアムズのソーシャリズムはその価値を完全に喪失してしまっ

たのか？

## 1 ソーシャリズムの悲劇と「わたしのソーシャリズム」

こうした問いを、迂回しながら（あるいはできればウイリアムズ流のしたたかさをもって）考察していくことが、本書の最大の目的である。そのとき、おもな考察対象となるのが、二〇世紀イギリスという時代と場所となるのだが、その理由をごく簡潔に説明しておきたい。二〇世紀は、ソーシャリズム——これを「生産手段の共有」を企図する営為とごく簡潔に本書は定義する——が、その国家レベルでの制度化をみた史上初の世紀である。もちろんそれは、スターリニズムから文化大革命を経てベルリンの壁崩壊にいたる、数え切れないほどの悲劇を見た世紀のことでもある。生産手段の共有を、人びとの手に文字通り開放していくことのアンビヴァレンスを、いやというほど思い知らされた世紀と表現してもいい。富や財だけではなく、言語や文学といった文化的なものを作り出す広義の「生産手段」——これを人びとが共有していくその渦中で、血みどろの悲劇がくりかえし起きたのが二〇世紀だった。文化大革命、あるいはクメール・ルージュによる悲劇は、その生々しい記録の一端にすぎないのだろう。

しかし二〇世紀イギリスを概観してみると、ここでは、ソーシャリズムとリベラリズムという一見して、水と油の関係にあるものが、奇妙に合流していることに気づく。生産手段の共有プロセスと、一見それとは無関係の「個人」という問題系が、いわば、ないまぜになっている時代と場所が、二〇世紀イギリスではないか。そのきざしは、ひとつには、「わたしのソーシャリズム」という突飛な言い回しにあらわれているように思う。あからさまな自家撞着（これは強調すべき点である）と形容するほかないこのフレーズを、その不意の死を迎える半年前、ウイリアムズは口にしたのだった——



わたしのソーシャリズムが、「小説『辺境』」に記述されているような「子どもの頃の経験をただ単に延長させ、いまの時点にあてはめたものに過ぎない、とは思っていません。この数千年間とは、それ以前と比してもより残忍で徹底的な搾取にみちた時代だったわけですが、二〇世紀の終盤という残忍さと搾取の度合いがもっと増す時代へと、あの幼年期が近づいているのを見るからこそ、あの幼年期をしあわせな時期だと見ることもできるのです。それは、共有される生の営みの可能性が具現化されている、それも、堅牢で破壊されぬものでありながら、つねに変容するかたちで具現化されている時期なのです。

(“The Practice of Possibility” 220: 傍点は引用者による)

留意すべきは、ここでの「ソーシャリズム」が、じつにパーソナルな感触をもって語られていることだろう。それは普遍的な概念でもなければ、いつでもどこでもそのまま実践可能な定式でもない。「わたしのソーシャリズム」は、文字通り、あくまで個人的なものであり、一足飛びに解釈してしまえば、それは、ウィリアムズという一人が生きのびるために、どうしても必要とした信条だった、ごく私的なソーシャリズムだった、とすら言えるのかもしれない。

とはいえむろんこと、「わたしの」という限定が付されているからといって、ウィリアムズの言う「ソーシャリズム」が、彼の完全な独創物だというわけではない。ソーシャリズムの根本をなす「生産手段の共有」という方向性は、「わたしのソーシャリズム」でもその核心部にやはり位置している。富や財を作り出すごく狭義の「生産手段」だけではなく、思想や文学のみならず、視点や感情のあり方をも形成する広義の「生産手段」を共有していくことをめざす（容易に全体主義と化す、ごく危険な）ソーシャリズムが、「わたしのソーシャリズム」の根幹をなしていること——ここに疑念をはさむ余地はない。

とはいえ、こうして補助線を引いてみてもなお、「わたしのソーシャリズム」というフレーズには、形式的な説

明からはみ出てしまうものがあるように思う。くり返して強調すると、そこには、じつに具体的で、なんとも個人的な感触がある。

## 2 デザイナー 考案者としてのソーシャリスト——個人と集団との緊張感

そこで、この厄介で興味深いフレーズを急いで解釈しきろうとせずに、この序章では、まず以下の点を確認しておくことにしたい。それは「わたしのソーシャリズム」という言い回しに潜む、とある効果の所在である。

通例、ソーシャリズムという信条は、集団のあり方へのみ（つまり共有のプロセスのみ）関わるものだとみなされている。ただしそこに、「わたしの」という所有格がいわば強引に付されることで、およそ縁遠く思える「個人」という問題が同時に問われるのではないか。「わたしのソーシャリズム」とは、個人と集団とのあいだの緊張した関係そのものが、つねに問われてしまうソーシャリズムのことである、と言ってもよい。あるいは集団の全体像を考案する営為のことを、かりにソーシャリズムと呼ぶとする。ある集団が、どのような歴史的流れのうちにあり、どのような未来にむかうのか、という全体的イメージ。その考案者たるソーシャリストがけっして神格化されないのが（たとえば聖<sup>セント</sup>ウィリアムズなどと間違っても呼ばれないのが）、「わたしのソーシャリズム」である、と言ってもよさそうである。デザイナーという一個人が、その帰属集団と取り結ぶ緊張感（あるいは距離感）こそ最大の問題となる、一種突拍<sup>クッパ</sup>もないフレーズとしての「わたしのソーシャリズム」。

ベルリンの壁が一九八九年に崩れ、東欧の「現存する社会主義」も雪崩を打って消失するそのわずか二年たらず前に、そしてウィリアムズその人の死のおよそ半年前に発せられた「わたしのソーシャリズム」——ここに含意される実践あるいは習慣とは具体的にどのようなものだったのか。この問いの答えを探ることが本書の最終目標となるのだが、ここでは、さきに示唆したように、ある種の迂回もしくは狡猾<sup>デヴァイスネス</sup>さが必要になってくる。

つまりウィリアムズ自身の言葉づかいを、ときに（少なくとも表面的には）裏切る必要性が出てくる、ということだ。ウィリアムズがそのソーシャリストとしての位置取りポジションをはっきりと打ち出すのは、おおまかに言って一九八〇年代のことだが、『希望の資源——文化、民主主義、社会主義』に収められたソーシャリズム論だけをながめてみても、「わたしのソーシャリズム」とは何なのか、というイメージをつかむことはむずかしい。「わたしのソーシャリズム」というフレーズが含意する、（くりかえすと）個人と集団とのあいだに横たわる緊張感テンションがつかみにくいのである。

そこで本書が用意するのが、リベラリズム（第一部）、二重視（第二部）、ネイション／ナショナリズム（第三部）という三つの迂回経路である。「リベラリズム」と（その実践でもある）「二重視」について言えば、これはウィリアムズという言葉づかいを「裏切る」かたちになる。彼はリベラリズムにたいし冷淡な態度を終始とりつづけたのだから、『キーワード辞典』の「リベラル」の項目を参照してみると、リベラリズムとは私的所有にまつわるものであると結論づけられているし（*Keywords* 181）、『現代の悲劇』には「リベラリズムの終わり」と名付けられたセクション（本書第6章参照）まであり、リベラリズムが「社会」という発想そのものと相容れない思想であることが含意\*4されている。

ただし、そのウィリアムズが、「個人（individual）」という問題系に、終始（ほとんど強迫的と形容しうるほどに）取り憑かれていたことを否定するのはむずかしい。とはいえ、この「個人」への関心は、「自由な個人」へのそれと、すぐに同一視されてしまうことだろう。そこで本書では、自由主義リベラリズムの社会主義的側面を、あるいは両者の重なり合いを、「言語」や「感情」を鍵語にしながら記述していくことで、ウィリアムズの関心をとらえてはなさなかつた「個人」のイメージ——本人の言を借りれば「突飛な個人（quirky individuals）」——これをつかむための手がかりとしてゆく。

### 3 二〇世紀イギリス——ヨーロッパ周縁との連続性<sup>「コンテュイニエティ」</sup>

これが第一部の狙いのだが、同時にここでは、「翻訳と自由」という一見して突飛な組み合わせを論じていくことにもなる。翻訳の実践が、リベラルな個人を作り出すプロセスともなる歴史の流れ——ドイツの初期ロマン派にして自由主義神学者フリードリヒ・シュライアマハーから、イギリスの保守主義的文化批評家マシュー・アーノルドを経て、ジュネーブで足かけ五年にもわたる(長い)革命的言語理論を講じるフェルディナン・ド・ソシユールへ——という翻訳理論の水脈<sup>フロウ</sup>を論じるのが第一部(第1章および第2章)となる。そこで強調しておきたいのが、この流れがヨーロッパ周縁にその複数の源泉をもつものだという点である。産業化後発国としてのドイツ、帝国イギリスの地理的周縁に住まう人びととしての「ケルト系諸民族」、フランス語圏の周縁としてのスイス。本書が記述するこのリベラルな流れを、欧州的自由主義の一種と呼びうるとしたら、それは、イギリス(Britain)一国というよりは、つねにヨーロッパを意識して演劇論を書いていたレイモンド・ウィリアムズの姿勢<sup>ポジション</sup>を想起させる。その演劇論は、イプセンやストリンダベリ、チェーホフら周縁のヨーロッパでその筋立て<sup>アクション</sup>をデザインしていた書き手たちのもつ価値を、英語圏にいわば移植しようとするものでもあった(『上演のなかのドラマ』『イプセンからブレヒトまでのドラマ』『現代の悲劇』)。本書の副題「二〇世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ」には、二〇世紀イギリスの文化を、イギリス一国で完結する活動としてとらえるのではなく、ヨーロッパのなかのイギリス(さらにはウェールズ)をかたち作ってきた活動としてとらえたい、という企図が込められている。

ともあれ、この翻訳と言語をめぐるリベラルな流れ(これを本書は「感情のリベラリズム」と呼称することに)なる)は、個人と集団との興味深い関係をつくりだしてゆく。同時代のドイツ語から古典古代の言語へ(シュライアマハー)、<sup>フリステイン</sup>俗物たちの英語から「ケルト系」の言語へ(アーノルド)、明確な意図をもって創造される言語か

ら、意図することなく創造される言語へ（ソシユール）——彼らはいわば「旅」をする。属する集団のためにこそ、集団を離脱する翻訳者、言語学者、あるいはエグザイルたち——彼らは属するコミュニティを外側から観察するのだが、その観察は、コミュニティをいわば成長させるためなのである。第1部は、この二重視と呼びうるアクションの、その思想あるいは構図を記述するものでもあるのだが、続く第II部（第3章から第5章）で記述してゆくのは、二〇世紀イギリスでこの二重視が実践されていく諸相である。

第3章でコリン・マッキネスやリチャード・ホガートを題材にして見るように、二重視は、とくに第二次大戦後のコミュニティとしての労働者階級をめぐる「ものの方」の「成長」を読み解くときの鍵となつてゆく。

第4章では、ブレヒト再発見者たちを題材にするのだが、マルクス主義的な法則を旗印にしてしまう彼らの二重視は、第3章のいわばロマン主義的な成長イメージにつきまとう「エリート臭」の払拭には成功する一方で、「特別な才能をもつ」知識人たちと大衆というロマン主義的な線引きを、太くなぞり書きしてしまうことになる。

第5章では、この境界線を越えるときなにか起こるのかを、デヴィッド・ヘア、ブレヒト、ウィリアムズ三者の交錯に光を当てつつ論じてゆく。

ただし第II部を終えて見えてくるのは、感情のリベラリズム、さらにはその実践である二重視が避けがたく含意してしまう、制約からの解放、制約そのものの解消というヴィジョンに、おなじく避けがたく絡みついている「性急さ」という感情の所在である。

この感情の構造のもたらす効果によつて、どうしてもつかむことができなくなってしまうのが、（本書の言う）「定住者の意図」である。リベラルな諸個人は、彼らがリベラルであるがゆえに、どうしても越えがたい「尾根」の存在に直面してしまう。制約を解消するのではなく、それをいわば「やり過ぎす」、という感覚。あるいは、その持てるリソースのすべてを、定住するためにのみ注ぐ、という感覚。それを共有できるのが、リベラルな諸個人というよりも、ウィリアムズの言う「突飛な個人」——つまり性急かつ耐える「個人」——なのだとした

ら、そうした「突飛な個人」が、「わたしのソーシャリズム」という場合の「わたし」を理解するための鍵ではないか——これが第Ⅲ部に通底するテーゼとなる。

そのとき補助線としたのがナシヨナリズムという問題系である。一九八〇年代のウィリアムズには、「ネイション」という語を全否定していないどころか、肯定的に見ている節がある。だとすれば、ラディカル根底的なネイションというウィリアムズの議論を理解することが、「わたしのソーシャリズム」の輪郭をつかむことにもつながっていくだろう。第Ⅲ部では同時期の英語圏ナシヨナリズム論もあわせて考察してゆく。

第6章は、その準備段階にあたる章であり、ウィリアムズの『現代の悲劇』を読解しながら、「私たち (we)」という語が拡張していく複雑なプロセスを論じた後、なおもそれが「イギリス (Britain)」という国民国家を念頭に置いてのものではないのか、という疑問を最後に提出する。

第7章と第8章はセットになっており、まず第7章では、一九七〇年代後半以降の英語圏ナシヨナリズム論を概観することで、ベネディクト・アンダーソン、トム・ネアン、レイモンド・ウィリアムズの三者にひそむ共通点を浮き彫りにしたのち、そこからウィリアムズがどう逸脱しているのかを、「場所固有の紐帯」プレイサブル・ポインツとしての「ネイション」という彼の(漠たる)主張のなかに探る。

第7章を経て、「定住者」の複雑な実相という問題系が浮上してくるのだが、続く第8章では、ウィリアムズの死後刊行作『ブラック・マウンテンズの人びと』を論じることで、近代にあっては残滓たらざるを得ない「個人」が、コミュニティ(あるいは根底的なラディカルネイション)と取り結ぶ関係を考える。このラディカルなネイションは、場所固有の制約を「やり過ぎ」ながら、ときに数万年にも及ぶ時間軸タイムスケールのなか、ごく複雑な成長をとげるものではないのだが、そこでは個人の「突飛さ」こそが重要なリソースになってくる。しかし、「突飛さ」という一般に敬遠される性質が、集団にとって、その生存に資するリソースになることなど、本当にあり得るのだろうか？

## 5 紀元前約一六〇〇〇年の「アフィリエーション」

しかしこの氷の地の果てで、そんなこと「人間のつくった石器があるということ」がありうるのか？  
……その石の大まかな化学成分は、さらにはその奇妙ななじみのない雰囲気は、かれ「ヴァアラーン」の視線をとらえてはなさい。石のうえに手をのせ、やさしく、その感触をさぐる。まぶたを閉じると、そのかたちは石打用の台座のもので、異邦人がしゃがみこんで石を削っている——そのすがたを目に浮かべることができたのだった。

*(People of the Black Mountains I 33)*

紀元前約一六〇〇〇年、場所は現在のイングランドとウェールズの境界沿いにひろがるブラック・マウンテンズ一帯、「大氷河の果て」の洞窟にすまう一族の男ヴァアラーンは、先祖たちが「殺す」ことに成功して食料にしたと伝えられる「氷の馬」を求めて大氷河に旅立つ。生まれてくる子が「おんなっこ」の場合、その子を「溺死」させねばならない、食料となる馬の群れが見つからないかぎり、そうせねば一族は冬を越せない。しかしヴァアラーンは、「氷の馬」はむろんのこと、大氷河を旅したという先祖たちの痕跡すら見つけることができなかつた。ところがその徒勞に終わった旅の最中、一族のものとはちがう奇妙な洞窟を目にした彼は、洞窟のそばにころがっている同じく奇妙な石から目を離せなくなる。この極寒の不毛の地に、自分たちのほかにも住んでいた人びとがいたのだ。「異邦人」ではあれ、この氷河の果てに人がすんでいたのだ。「おんなっこ」を生んだオールメットに伝説は（その一部は）本当だった、この地で生きていけるかもしれないと嘘をつくヴァアラーンは、赤ん坊を抱いている自分の姿をイメージし、なにかを叫び、そして、「おんなっこ」ではなく「血のついたコケとその上に載せられたへその糸」を川にむけ投げすてたのだ……（29-36）。

第8章で論じる『ブラック・マウンテンズの人びと』で、読み手に鮮烈な印象を残すのが、この「大氷河の果

てのヴァラーン」と題された紀元前約一六〇〇年のエピソードである。「資料を渉猟しながらの想像力(sourced imagination)」とみずから形容し、考古学者もそれに異を唱えていないこの作品(Evans 197)で、ひとつの焦点となっているのが、本書第Ⅱ部が問題にする二重視であり、第Ⅲ部がその見極めを試みる「定住者の意図」である。上記の挿話において、旧石器時代の民ヴァラーンは、洞窟カウラーの一族というコミュニティの外側に存在する大氷河へと旅に出る。それは一族の(そしてみずからの)子どもを殺さずにすむようにするための旅なのだが、その経験は、コミュニティにたいする彼のものの見方アイを変容させることになる——「異邦人ストレンジャー」たちと自分たちは「氷の地の果て」に住み着こうとする意志においてつながっているのだ、一族とは血のつながりのことだけではないのだと。

この「灰色がかった目」をしたヴァラーンと「氷河から流れる薄緑の水……そういう色の目」をしたオールメットのエピソードは、紀元前約一六〇〇年の、いつてみれば、「アフィリエーション」、「養子縁組的な紐帯」を物語る挿話、ということになるかもしれない。ヴァラーンは、一族の元の居住地「南の地サウスランド」(結氷したプリストル海峽の南側の地。おそらくヨーロッパ大陸もそこに含まれる)に戻らずに(乳児を連れての旅は氷期には不可能なのだ)、ブラック・マウンテンズに定住し生存していくために、洞窟カウラーの一族がその身を浸してきた歴史的な流れフローをあらたにデザインする。これが定住者の経験、つまり「場所のソーシャリズム」をウィリアムズがデザインする際の材料ということになるだろうし、「わたしのソーシャリズム」を理解するための大きなヒントとなるように思われるのだが、この両義的と言うほかない(ヴァラーンはオールメットに嘘をつくのだから)ソーシャリズムと、(初期)近代以降のリベラリズムとの、欠くべからざる緊張関係を記述することもまた本書の目的なのであって、第Ⅰ部ではまず翻訳理論を素材に、リベラリズムの歴史的展開を追ってゆく。

\* \* \*



最後に、本書の言葉<sup>ワレディンク</sup>つかいならびに構成についてごく簡潔に説明しておきたい。「流れ」<sup>フロウ</sup>については、ウイリアムズのテレビ論 (Television 78-118) で使用されていることで知られる言葉でもある。例えばひとつのチャンネルにおいて、「別々」<sup>ディスタクリート</sup>の番組が連続して放送されるときに、視聴者が「自然さ」を感じてしまうとしたら、そこには「流れ」<sup>フロウ</sup>があることになる。つまり(番組制作者たちによる)人為が加わることで、そのつながりに「自然さ」が生じるものが「流れ」<sup>フロウ</sup>である。もともと「別々」<sup>ディスタクリート</sup>の思想や経験あるいは出来事につながりを「歴史」や「系譜」ではなく「流れ」<sup>フロウ</sup>と本書が呼ぶとき、そこにはなんらかの人為が加わっていて、だからこそそのつながりに「自然さ」が生じており、ということとは、その「流れ」<sup>フロウ</sup>のあり方には人為的な介入の余地があることが含意されている——こう考えていただきたい。

また「アクション」については、既述のようにウイリアムズは演劇論<sup>ドラマ</sup>に終始おおきな関心を注いでいたわけだが、そこでの鍵語となる。彼の演劇論の根底にあるのは、ギリシア悲劇以来、共同体の営みと切り離せないものとしてドラマが書かれ上演されてきた、という認識なのだが、小説にせよドラマにせよ、それを論じる際、「プロット」や「物語」ではなく「アクション」という語を使うとき、ここでは、共同体そしてそこから離脱しきれない「個人」——この構図が<sup>よく</sup>含意されることになる。さらなる含意については第1章第1節に記述してある。「デザイン」については、終章第3節に記述した。

構成については、本書のテーマのひとつとなっている(リベラルな)「性急さ」という観点からみて、いわば「浮いて」いる——つまり性急さが際立っている章がいくつかあることにお気づきになるかもしれない。こうしてみると、とくに二〇一一年の東日本大震災を契機として、筆者が、その「性急さ」の変化を経験したことがよくわかる。震災前の方が「性急」であり、その後、「やり過ぎ」時間性の方に徐々に向かっている、というまともも可能かもしれない。本書の目的は、そうしたリベラルで「性急な」ショートスパンの時間軸と、定住者的な口

ングスパンのそれとのあいだの、交錯と緊張感を浮き彫りにすることにもある以上、「浮いて」いる章の「性急さ」を後から過度に消去してしまうことのないように、そうした部分については一定程度の修正にとどめてある。